





「サリエ、フリーデル、ちょっとお願いがあるんだけど……」

ダンジョン攻略後の夕食の席で、

私は親友二人に真剣な顔で「う切り出した。

何事かと怪訝な表情を浮かべる彼女らに、
少し間を置いてから私は重々しい口調で続けた。




「ずっと欲しかったレアアイテムを街の市場で見つけたの……
けど手持ちが足りなくて……」

またか、という表情をしてフリーデルが大きいため息をついた。

「違うの！今回ののは本当にすごいアレなの！！
前に出回ったのは10年以上前だから！」

「いつものナナの欲しがり癖ね。
アナタ、何でもかんでも欲しがるところからいつまでたつても金欠なのよ。
もっと節約することを覚えなさい」と





私たちが拠点にしている街の中央には
近隣随一の大きさを誇る市場がある。

ここでは日用品の取引のほかに、
冒険者がダンジョン探索で見つけた物品も売り買いされている。
その中でも極めて稀にしか見つかからないレアアイテムは
特に高値で取引されるのだ。

一度のがせば次いつ出会えるか全くわからない、
一期一会な一品ゆえに、大抵価格は天井知らずだ。

「今回手に入れられなかったら現役中はもうチャンスないかもだし……
必死なんだから！」

黙って聞いていたサリイが「あ」とつぶやいて、
得心がいったという顔をした。

「それでナナ、最近ダンジョン探索をがんばってたんだね。
私達みたいな冒険者が大きなお金を稼ごうと思ったら、
それこそダンジョンに潜ってレアアイテムを見つけるしかないもんね」



「うん……でもダンジョンは博打要素が強すぎるんだよ。今のところ成果ゼロだし……」

新ダンジョンでも見つければ別だけど……ないし」

それでも一応はまっとうな手を尽くした後なのだ。だけどやっぱりどうしようもなくて、二人の親友に頼ってみたのである。

悠長なことを言っているのはいつ人手に渡ってもおかしくないのだから。





「んん、そっか。わかった。ナナがそんなに困ってるなら貸すよ。
この間まとまったお金が手に入ったらから、今は少し余裕があるんだ」

見かねたサリイが救いの手を差し伸べ得てくれた。
困ってるときはやっぱりサリイが頼りになる。

相談してよかったーと思いきや。



「だめよサリイ。ナナを甘やかすところくなことがないんだから」
いい流れを断ち切るように、ピシヤリとフリーデルが言う。

えええ……と私は呻くように不満の声を上げた。

こういうときのフリーデルは厳しい。

雲行きが怪しくなってきた。

私は返答に詰まっています。
フリーデルはいつも痛いところを的確に知っている。
とはいえ「まかすわけにもいかない。」

「だいたいいくらなのよ、そのレアアイテムとやらは。
ナナはいくら必要なの？」






「えっと……これくらい……」と言いながら
私はおずおずと指を三本立てて見せた。

「30万?」というサリイの問いかけに、対して
ふるふるとう首を振って否定の意を示す。


「えへへ……あの、300万……です」

愛想笑いを浮かべる私とは対照的に二人は絶句した。
しばしの沈黙の後、
額に手を当てながらフリーデルがふたたび大きなため息をついた。



「あのねえ……普段の私達の稼ぎがどれくらいだと思ってるの。諦めなさい。」

「そんな高額アイテムへアナタに分不相応だわ。もとを取れる保証だってないじゃない」



「まあ、その、たしかに、
効果に比べてちょっと高いかな〜とは私も思うんだけども！
でも、これがあつたら二人で出かけるときも役に立つよ？
お金はちゃんと後で返すし……」

「そこは信用してるけど。」

でもそのお金で先に用意すべきものもあるでしょう？
装備の手入れ、消耗品の購入、食事代宿代などなど。

冒険者稼業は不安定なうえに日々の出費が多いんだから。
無理に借金して買ったところで日々の冒険が苦しくなるだけよ」

ぐうの音も出ない。
ちらりとサリイに視線を投げると、
苦笑いを浮かべながら「今回はフリーデルの言う通りだね」と返ってきた。

望みは断たれてしまった。
あとはもう、売れてしまう前に
ダンジョン探索で一山当てる可能性にかけるしかない。

「はああ……私の愛しの『星々の指輪』……」
机に突っ伏して私はちよっぴり泣いた。



ぐうの音も出ない。
ちらりとサリイに視線を投げると、
苦笑いを浮かべながら「今回はフリーデルの言う通りだね」と返ってきた。

望みは断たれてしまった。
あとはもう、売れてしまう前に
ダンジョン探索で一山当てる可能性にかけるしかない。

「はああ……私の愛しの『星々の指輪』……」
机に突っ伏して私はちよっぴり泣いた。

ぐうの音も出ない。

ちらりとサリイに視線を投げると、

苦笑いを浮かべながら「今回はフリーデルの言う通りだね」と返ってきた。

望みは断たれてしまった。

あとはもう、売れてしまう前に

ダンジョン探索で一山当てる可能性にかけるしかない。

「はああ……私の愛しの『星々の指輪』……」

机に突っ伏して私はちよっぴり泣いた。

ぐうの音も出ない。

ちらりとサリイに視線を投げると、

苦笑いを浮かべながら「今回はフリーデルの言う通りだね」と返ってきた。

望みは断たれてしまった。

あとはもう、売れてしまう前に

ダンジョン探索で一山当てる可能性にかけるしかない。

「はああ……私の愛しの『星々の指輪』……」

机に突っ伏して私はちよっぴり泣いた。

……という遣り取りがあったのがちょうど一週間前。





いま私たち三人の目の前には、
その念願の『星々の指輪』が鎮座ましましてる。
なんで？どうして？？

私は目をパチクリさせながら、
コレを持ってきたフリーデルの方を見上げた。



私と目が合うと、フリーデルはきまりが悪そうに
そっぽを向きながら言った。



「ちよっと臨時の収入があったのよ。
それで、ナナがあそこまで欲しがるのってどんなものか
興味があったから買って見たの。
私にはあんまり役に立たなかったけど……」



それはそうだ。

このアイテムは武器に星々の加護を付与するもの。

武器を振るうたびにこぼれ落ちた星々が流れ星のように

相手をおそう、近接戦闘向けの加護である。



剣士である私にとっては有用でも、

魔法によるサポートがメインのフリーデルには
使い勝手の悪いアイテムに違いない。




「じゃ、しょうがないわね……
好きに使ったらいいわ。
返すのは、アナタが満足したらでいいから」

「それはダメ！お願い！お願いします！
フリーデル様々貸してくださいっ！」

「えええ？！」
「い、嫌ならいいのよ。売っちゃうから」

「それで、私はもう満足したから……
アナタが使いたいなら貸してあげるわ」





コトリと目の前に指輪が置かれた。

私はそれを手に取って、さっそく指にはめてみた。


近くの照明にかざすとはめ込まれた石がキラキラと輝いて、
私はしばらくうっとりとしてそれを眺めた。

クスクスとサリイが小さく笑った。

「フリーデルってば、私にはあんな風についておいて……」

自分のほうがよっぽどナナに甘いじゃない。

今だって幸せそうにナナの「」を見つめちゃって「」



「そんなこと!」と慌ててフリーデルは否定したけど、私だって彼女が自分用に買ったわけじゃないことはわかる。


ちよっと素直じゃないところがある娘だから。

きちっと背筋を伸ばして、私はフリーデルにお礼を言った。

「ありがとう!これ、大事にするからね!」



面と向かってお礼を言われたフリッデルはちょっとだけ躊躇したけど、
結局最後は「そうしてもらえると私も嬉しいわ」と言っ
て照れくさそうに「ゴリ」と微笑んだ。



レアアイテムを前にして盛り上がった私達は、
それをネタにしばらくの間あれこれ話をした。

話が資金のことに移ると、サリイが不安げにフリーデルに尋ねた。



「それにしても、よくあんな大金を用意できたね。
なにか変なことに巻き込まれたりしてない？」

「大丈夫よ。すっごく実入りの良い限定クエストがあったの。
依頼元も信用できるところだったし」

「いなく。私も受けないな！」

「ナナなりそついうと思っただけど……」
募集は一人だけだったから私が受けてそれで申し訳ないよ。」

「おかげでアナタはその指輪を手に入れられたんだから
それで満足なさいな」



「あはは……そうそうおいしい話はないか。そうだよ。うん、ありがとうフリーデル」

私の指に光る、フリーデルが(貸して)くれた指輪。

眺めていると思わず笑みがこぼれてしまう。
うまく使いこなして、フリーデルに恩返ししなきゃね!!



この街の冒険者ギルドのいいところは色々あるけど、
その一つは共同浴場を利用できる点だと思う。

ギルドに所属する冒険者はだれでも、

半野外の広々としたお風呂をいつでもゆったりと楽しむことができる。

特にダンジョン探索のあとの汗とホコリにまみれた体を

さっぱりと洗い流す瞬間は最高に気持ちがいい。

そんなわけで、この日サリイとフリーデルとの三人パーティで

ダンジョンへ出かけた帰り道、私たちは一風呂浴びていくことにした。

「わー、やっぱいつ来てもいいねえー」

浴場に入って開口一番、私は喜びの声をあげた。

そのまま浴槽へと飛び込むとでも思ったのか、
背後からフリーデルの「待ちなさい」の声がかかった。

「まずは身体の汚れを落としてからよ。

湯船を汚したら迷惑ですよ」

「わかってるよそれくらいさ。」

もう。お姉さん風を吹かせちゃってさ」

ぶつぶつ言う私の後に、

小言を続けるフリーデルとクスクス笑いのサリイが続く。



私たちは三人ならんで近くの流し場に腰をおろして
身体を洗い始めた。

そこで私はふと違和感を覚えた。

「フリーデル、なんでタオルを巻いたまま身体を洗ってるの？

それじゃあよく洗えないでしょ」

「い、いいのよ。」**「うううう洗い方もあるの。」**

プイっとそっぽを向くフリーデル。

いやいや無いでしょ。

タオルの下をどっやっど洗ッのよ。



そこでキラリと私の勘がきらめいた。

これは何かを隠してる態度だ！

そうとなれば友人としてせひとも確かめないと。

私はこっそりフリーテルを包むタオルの裾を掴むと、

タイミングを見て一息に引き抜いた。

「タオルつけたままはマナー違反だよ！
隠さずせんぶ見せなさい……って、

あはは！フリーテル、どうしたのそのお腹！」



タオルを剥ぎ取られてあらわになった彼女のお腹は、
ぽこりと膨らんでいた。

もともと彼女はスラリとしてスタイルのいいほうだったから、
尚更膨らみが目立つ。


なるほどなるほど、太っちゃったのを見せたくなかったわけか。



An anime-style illustration of three young women in a hot spring at night. The woman on the left has long blonde hair and blue eyes, looking surprised. The woman in the middle has long dark blue hair and yellow eyes, looking towards the blonde woman. The woman on the right has short light blue hair and red eyes, with soap suds on her head and chest, looking towards the other two. They are all wearing orange bikini-like outfits. The hot spring is in a stone basin with wooden tubs, and steam is rising from the water. The background shows a wooden building and trees under a starry night sky.

「あらら〜」
生活習慣にも口うるさいフリーデルが
こんなだらしないお腹をじてるなんて、らしくないなあ。」


「身体のたるみは心のゆるみよ」とかよく言ってるのに。
あ、お屋こはんが控えめだったのも、
もしかしてダイエットだったのかな〜？」

An anime-style illustration of three young women in a hot spring at night. The woman on the left has long blonde hair and is pulling a blue towel. The woman in the middle has long dark blue hair and is looking towards the woman on the right. The woman on the right has short light blue hair and is sitting with her hands on her head, which is covered in white foam. They are all wearing orange bikini-like outfits with white foam on their chests and thighs. The background shows a wooden building and trees with soft lighting.

ここぞとばかりに意地悪な言い方をしてフリーデルを煽ってみた。
さつき子供扱いされた仕返しも兼ねて。

フリーデルの顔がみるみる真っ赤に染まっていって、
羞恥心でいっぱいになっている様子が手にとるようにわかった。

「違うから!!これは、このお腹はそういうのじゃないから!!
私は別に不摂生で太ったわけじゃ……!」

An anime-style illustration of three young women in a hot spring at night. The woman on the left has long blonde hair and is looking towards the other two. The woman in the middle has long dark blue hair and is looking at the woman on the right. The woman on the right has short grey hair and is being touched by the woman in the middle. They are all covered in white foam. The background shows a wooden building and trees with glowing lights.

まるで言い訳のようにそこまで言った後、
フリーデルはハツとして押し黙ってしまった。

彼女がこんな慌てるなんて珍しい。

他人にも自分にも厳しい人だから
太ったとぼれるのをよっぽど気にしてたのかも。

面白いものが見れちゃった。

「まあ太っちゃったのはしょうがないからさ。

これからの対策を考えようよ。

やっぱダイエットには運動が一番だし、一緒にダンジョン通いするっ

ちょうど私、しばらく金策したいと思ってたんだよね。


フリーデルがサポートしてくれると助かるし、

「一緒にどう？サライと三人で」

友人としてのお節介が半分、

そしてからかっちゃったお詫びが半分。

私はフリーデルを誘ってみた。

An anime-style illustration of three young women sitting in a hot spring at night. The woman on the left has long blonde hair and is wearing a pink bikini with white foam on her chest and legs. The woman in the middle has long dark blue hair and is also wearing a pink bikini with white foam on her chest and legs. The woman on the right has short light blue hair and is wearing a pink bikini with white foam on her chest and legs. They are all looking towards the viewer with various expressions. The background shows a wooden building and trees, with steam rising from the hot spring. There are some glowing bubbles or lights in the air.

さすがに笑っておしまいじゃあ酷すぎるもんね。
友人の悩みは解決してあげたいし。

フリーデルはちょっと考えてから

「私は構わないけど……」と応えてサリイを見た。

「サリイはズレたわ。」

「ごめん！」

実は明日から長期の傭兵のお仕事を受けちゃって……
しばらくパーティ組めないの。ホントごめんねー！」

「ありゃ、そうなの？」

「ほら、こなただ酒場で話しかけてきた男性パーティの……！」



An anime-style illustration of three young women in a hot spring at night. The woman on the left has long blonde hair and is pulling a white towel. The woman in the middle has long dark blue hair and is looking towards the woman on the right. The woman on the right has short grey hair and is washing her hair with soap. They are all wearing light-colored, possibly pink or orange, bikinis. The background shows a wooden building and a night sky with stars and moonlight. There are some glowing bubbles or steam in the air.

ああ、と私はその姿を思い出す。

あのパツとしない男冒険者の二人組かあ。

名前はアルとカイとか言ったっけ……。

仕事のできななさそうな奴らだと思っただけど、

サリイを雇えるなんて意外とお金もってたんだ。

まあ、そんなこととはどうでも良くて。

「それなら二人でダンジョン通いだね」
と私はフリーデルに告げた。

サリイがいないと戦力は落ちるけど、
剣主職の私と支援職のフリーデルがいれば
大抵のダンジョンは踏破できる。

目的が金策とダイエットなんだから問題はない。

「ナナとしばらく二人つきり？」

「そう……そういうのもたまにはいいわね……」

と言ってフリーデルは頬をふたたび赤く染めた。



「じゃあ決まり！」

元の体型を目指してハードめに行くから覚悟しててよね！」

「アナタこそ、私の足を引っ張らないように努力なさい」

ツツとした物言いとは裏腹にフリーデルの口元は緩んでいて、
喜びがにじみ出ている。

私はサリイと目を合わせてクスクス笑った。



翌日から私たちは二人パーティでダンジョン通いを始めた。

フリーデルの支援魔法があると戦闘は楽になるし
アイテムの消耗も抑えられる。

さらに荷物を二人分持てるから、

一日あたりの探索範囲がぐっと広がる。

ダンジョンの稼ぎはレアアイテムの発見にかかっているから、
探索範囲が広がれば自然と稼ぎも増える……
ついでにいいこと尽くめなんだよね。

実際、通い始めてから数日も経たないうちに
私たちはレアアイテム（小粒だけど）を手に入れることができた。
金策としては上々な滑り出した。

まあ私の必要な額にはまだまだ遠いんだけど……。




「欲しがっていたレアアイテムを手に入れたばかりなのに、
金策までして今度は何がほしいのよ」

「んんんんん、まだ秘密！」


ある日の道中、
ちよつとうんざりした様子のフリーデルが訊いてきた。





ダイエツトという大義名分があるとはいへ
私の都合に毎日つきあわされているわけだし、
理由くらい知りたいと思うのは無理もない。

だけど私は適当にはぐらかした。
フリーデルにはまだ知らせるわけにはいかない。




私がいま欲しいもの。

それはフリーデルへの誕生日プレゼント。


ずっと前に彼女が「高くてさすがに手が出ないのよね」と言って諦めていた
レアアイテムを『星々の指輪』のお返しにプレゼントする……

それがこのダンジョン通いの目的だった。



その金策にフリーデルを付き合わせるのとはどうかと思っけど、
私の取り分で買うんだから問題ない。

……うん、問題ない。




それからフリーデルにはお小言を言われっぱなしだったけど、
内心では二人パーティを楽しんでるのが透けて見えて
逆に微笑ましかった。

ただ、よく見るとお腹はぼっこり膨らんだままで、
ダイエットのほうはあんまり成果が出ていないみたい。

もうちょっと運動量の多いルートへ変更しようかなど
ぼんやり考えていた頃、トラブルが起きた。





その日もいつものとおりダンジョンに潜り込み、
小休止をとりながら軽食を食べていたとき。

「うっ……おえっ……」

それまで普通におしゃべりしていたフリーデルが
突然うめき声を上げて、前かがみになった。

そのまま口元を押さえて断続的にえづき続ける。

「うえっ……うええっ……うっうっ……」

「え？え？どうしたの？」

フリーデル、大丈夫……？」

問いかけに返事はない。

顔を覗き込むとフリーデルは

眉根を寄せて苦悶の表情を浮かべていた。

口に当てた手を伝い、糸を引きながら唾液がこぼれ落ちていた。

これはちよっと……普通じゃない。



「た、食べ物に当たった？でも私も同じの食べたし……？
こんなときは解毒薬？あれ、違っつけ？
ど、どっけ……どっけしたらさ……」

「大丈夫よ……最近ときどき」っなるの。
しばらくじっとしてれば良くなるから……
心配かけてごめんささ」

フリーデルは、

慌てる子供をなだめる母親のような口調でそういった。



最近？最近っていつからだろう？

「最近のダンジョン通いの間も、フリーデルはずっと無理してたんだろっか。」

「わかった……でも今日はもう戻ろう？
探索の続きは体調が戻ってから。ね？」

「そう……ね。ごめんなさい、ナナ」





申し訳無さそうな視線を向けるフリーデル。
ううん、謝らなきゃいけないのはこっちだ。

知らずはずっとフリーデルに無理させていたなんて。
これじゃあ本末転倒じゃない。

この出来事を境に、

結局フリーデルはしばらくお休みをとることになった。

彼女曰く、

「お医者に診てもらったら

『安静にしているように』と言われた」とのこと。

良かれと思って誘ったパーティだったけど、

結果的にフリーデルに負担をかけただけになっちゃった。

今思えば、あのお腹も病気か何かで、

ただ太ってたわけじゃなかったのかもしれない。

少しのあいだ思いつきり落ち込んだ後、

私は気持ち切り替えた。がんばってお金を稼がなきゃ。

フリーデルを元気づけるためにも、

計画通りにプレゼントを手に入れるんだ！

だけど、いつも組んでるサリイは

別パーティに取られ(たいが長期の契約みたい)、
フリーデルは戦線離脱。

あいにくパーティメンバー募集の情報もない。

仕方なく単独でダンジョンに通ってみたけれど、
稼ぎはやっぱり少なく、目標に全然届きそうにない。

逸る気持ちだけが空回りしていつて、

たくさんあった時間はどんどん過ぎていく。

気づけばフリーデルの誕生日まで残りわずかになっていた。

こんな調子じゃ、

フリーデルの誕生日までに

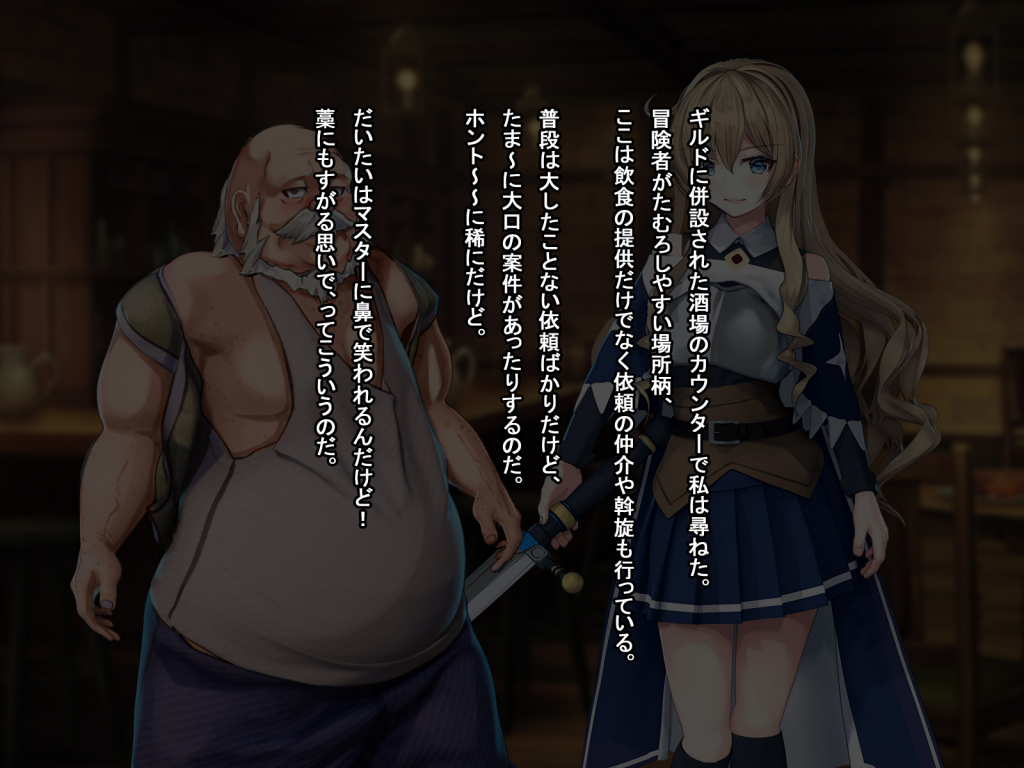
間に合わない可能性がすつごく高い。

レアアイテムでの一発逆転……

以外の手も用意しておきたいのが
正直なところ。

「というわけで短期で実入りの良い依頼を探してるんだけど……
ないかな？」





ギルドに併設された酒場のカウンターで私は尋ねた。
冒険者がたむろしやすい場所柄、

ここは飲食の提供だけでなく依頼の仲介や斡旋も行っている。

普段は大したことない依頼ばかりだけど、
たま〜に大口の案件があったりするのだ。
ホント〜に稀にだけど。

だいたいはマスターに鼻で笑われるんだけど！
藁にもすがる思いで、ってこういうのだ。



しかしこの日はマスターから予想と違う反応が返ってきた。



頭頂部まで禿げ上がった赤ら顔のマスターは、
ポリポリと頭を掻きながら
「お前さんは運がいいぞ」といって一枚の紙を差し出してきた。

「今朝舞い込んだ依頼だな、
まだ揭示前の案件なんだが……
ほら、報酬をしてみる。すげえ額だろ？」

言われてゼロを数えてみる。

……千、万、十万、百万……！！？

え、こんなに！？




「しかも依頼主は王立の研究所だ。
嘘や詐欺の類いではないだろうなあ。
若干、募集条件が厳しいがな。
『若く健康な女性であること。
優れた血統を有すること。』
冒険者としての実績が特に優れていること」

「私じゃん!!」

思わず大声をあげてしまった。
マスターがびっくりして目を剥いた。





ごめん。でもこれ、私だわ。

若いし元気だし女だし、実績はギルド上位で申し分ないし、
血統は……
うーん、お父さんもお母さんも有名冒険者だったから
良しって「ど」にしてお「う」。

つまり条件はピッタリ、報酬は十分。

こんな依頼に出会えるなんて今日の私はツイている。

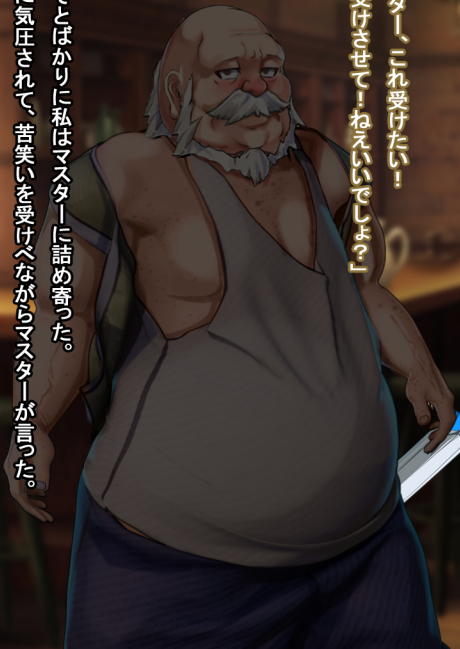
逆に逃したりしたら、こんなチャンスはもう無さそつ。

「マスター、これ受けたい！」

私に受けさせて！ねえいいでしょ？」

「こゝろとばかりに私はマスターに詰め寄った。

勢いに気圧されて、苦笑いを受けながらマスターが言った。



「本当はちゃんと揭示してからなんだが……
まあ他でもないナナちゃんの頼みだ。いいよ、持っていきな。
代わりに今度またケツを触らせてくれよな！」

「うう、ヒロオヤジ」

ガハハと笑う主人。
まったく、これさえなかったら
もうちよっと頼りがいがあるんだけど……。





とにかく依頼は手に入れた。

すぐにでも依頼主のもとへ出かけなきゃ！

足取り軽く、私は目的地の『キメラ研究所』に向けて出発した。





とにかく依頼は手に入れた。

すぐにでも依頼主のもとへ出かけなきゃ！

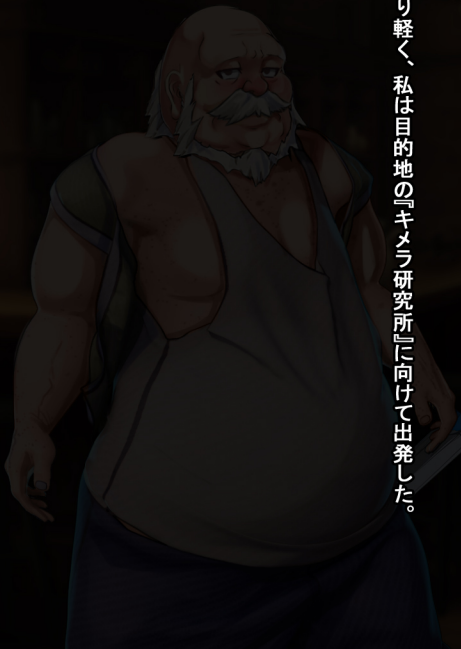
足取り軽く、私は目的地の『キメラ研究所』に向けて出発した。

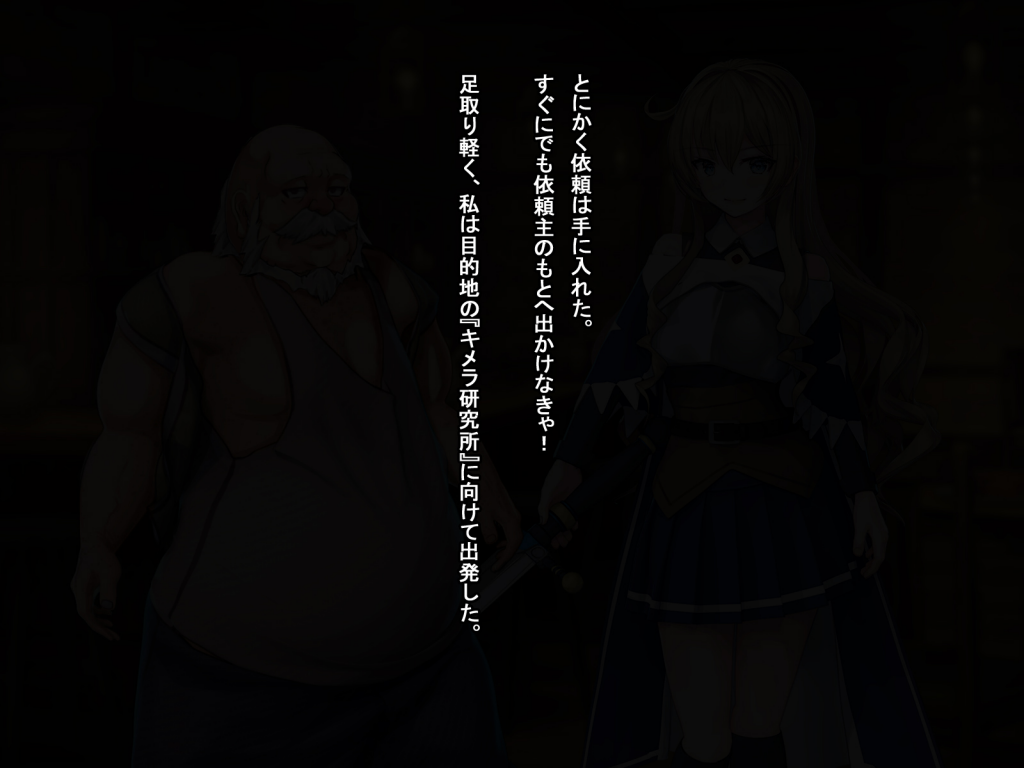


とにかく依頼は手に入れた。

すぐにも依頼主のもとへ出かけなきゃ！

足取り軽く、私は目的地の『キメラ研究所』に向けて出発した。





とにかく依頼は手に入れた。

すぐにでも依頼主のもとへ出かけなきゃ！

足取り軽く、私は目的地の『キメラ研究所』に向けて出発した。



出てきた担当の人はラムダさんという女の子だった。
さっそく経歴書の確認、身体検査、
インタビューが順に行われた。



一通り終わった後、
ラムダさんは「まさに我々が求めていた人材です！」
と目をキラキラさせながら言ってくれた。



「まさか募集して一日も経たずに
こんな理想的な方に来ていただけるなんて、本当に助かります。
厳しい条件の依頼なので
ぜんぜん応募がないんじゃないかと心配してましたから……」

「そんな！報酬もいいし、他の人に取られたら困ると思って
大急ぎで来たくらいです。
私のほうこそツイてる……って感じですよ」

面と向かつてのベタ褒めに照れつつ、

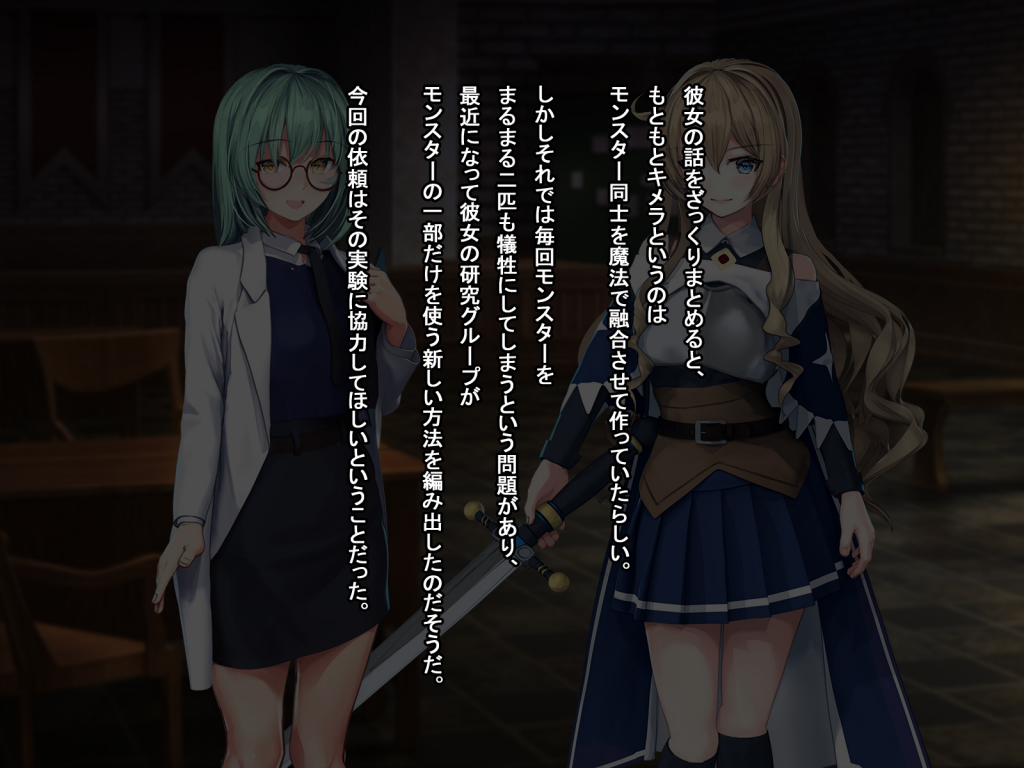
私はお礼を言った。

ラムダさんは嬉しそうにウンウンとうなずき、

「それでは」と話を続けた。

「改めて、依頼内容『キメラ製造への協力』について説明しますね……」






彼女の話をやっくりまとめると、
もともとキメラというのは
モンスター同士を魔法で融合させて作っていたらしい。

しかしそれでは毎回モンスターを
まるまる二匹も犠牲にしまうという問題があり、
最近になって彼女の研究グループが
モンスターの一部だけを使う新しい方法を編み出したのだそうだ。

今回の依頼はその実験に協力してほしいということだった。



「そういうわけで貴女には我々の作ったキメラの相手を
してもらうことなるのですが……平気ですか？」
とラムダさんは伏し目がちに言った。

「もちろん！キメラといってもモンスターの一種ですよね。
普段からよく相手にしてますから！」とニコリ答える私。

その返答に、彼女は驚きを隠せない様子だった。

「そうなんですか！？」

冒険者稼業は大変だと伝え聞いていましたが、
そのような破廉恥ことが頻繁に起っているのですね……」



「ハレンチ??」

それくらい何てことありませんよ。

「日常茶飯事です!」


任せてください!と私は胸を張って答えた。

ダンジョン探索は中に巢食うモンスターを撃退しなければ
成り立たないから、私は百戦錬磨だ。
報酬の良さから見て相手のキメラは強力なんだろうけど、
私の実力ならいい勝負をできるはず。




「こういってはなんだけど、

戦闘に関してはギルド内でもかなり上位っていう自負があるからね。」



契約書にサインすると、
彼女は早速前金として報酬の半額をくれた。
正直いってプレゼント資金にはこれと今までの稼ぎで十分だ。
フリーデルの誕生日には余裕で間に合う。
私はほっと一息をついた。

依頼の開始は二週間後。
それまでに準備を整えておくとラムダさんは言った。




別れ際、彼女は「そうそう」と言っで、
顔を赤らめながらこう付け加えた。

「今日から当日まで、性交は控えてくださいね」

「セイコウ……？」

音の意味が理解できなくて、私はオウム返しに呟いた。



「男性とのまぐわい、セックス、エッチの事です。
その……じ、実験に障りますので……」
「え!? あ!はい、わかりましたあ〜」

あははと愛想笑いをした私は慌てて外へ出た。



突然ふられた謎の下ネタに私の心臓はバクバク言っていた。

すごく真面目そうな人だったのに、

なんで急にエッチの話なんてしたんだろう……？

実験に関係するってのもよくわかんないし。

……っというか私、恋人いたことないしそもそも処女だし!!

そのあとすぐに市場へ行って、

私はフリーデルへのプレゼントを手に入れた。

先に買い手がついちゃったら元も子もないもんね。

手に入れて改めて、

これならゼツタイ喜んでもらえるって思っちゃった。

つていうか、フリーテルも臨時収入があつたのなら

私にレアアイテムを買うより

先にこっちを買いなさいよという話だよね。


めちやくちや実用性重視のアイテムだったし。

ま、自分を後回しにしちゃうところが彼女らしいんだけど。

とにかくこれで準備は万端。

私はワクワクしながらフリーテルの誕生日に思いを馳せた。





約束の一週間はあつという間に過ぎて、
私はふたたびラムダさんのもとを訪れた。

今日からいよいよ依頼のスタートだ。
もらった報酬のぶんはしっかりお返ししないと！


「それで、どんなキメラと戦えばいいんですか？
どんな相手でも私がんばっちゃいますよ！」

意気揚々と問いかける私に対し、
けれどラムタさんはポカンと呆けた表情でそれに応えた。

「戦う……ですか？」

いえ、そういうお願いはしませんけど」





今度は私が呆ける番だった。
あれ、私なにか勘違いしてる？

でもでもこないだの話では……。
嫌な予感がして、背筋にへんな冷や汗が流れた。

「ええと……」

『キメラの相手をする』という

お話じゃありませんでしたっけ……」

模擬戦でキメラの戦闘力を測りたいとか、そういうことじゃ……」

おずおずと尋ねる私に、

ラムダさんは大きく手を振って否定した。

「違います違いますーそういう『相手』ではないです……」



「セイコウ……？」

セイコウ、と頭の中でもう一度繰り返す。

そういえば先週帰り際にもこの遣り取りをしたっけ。

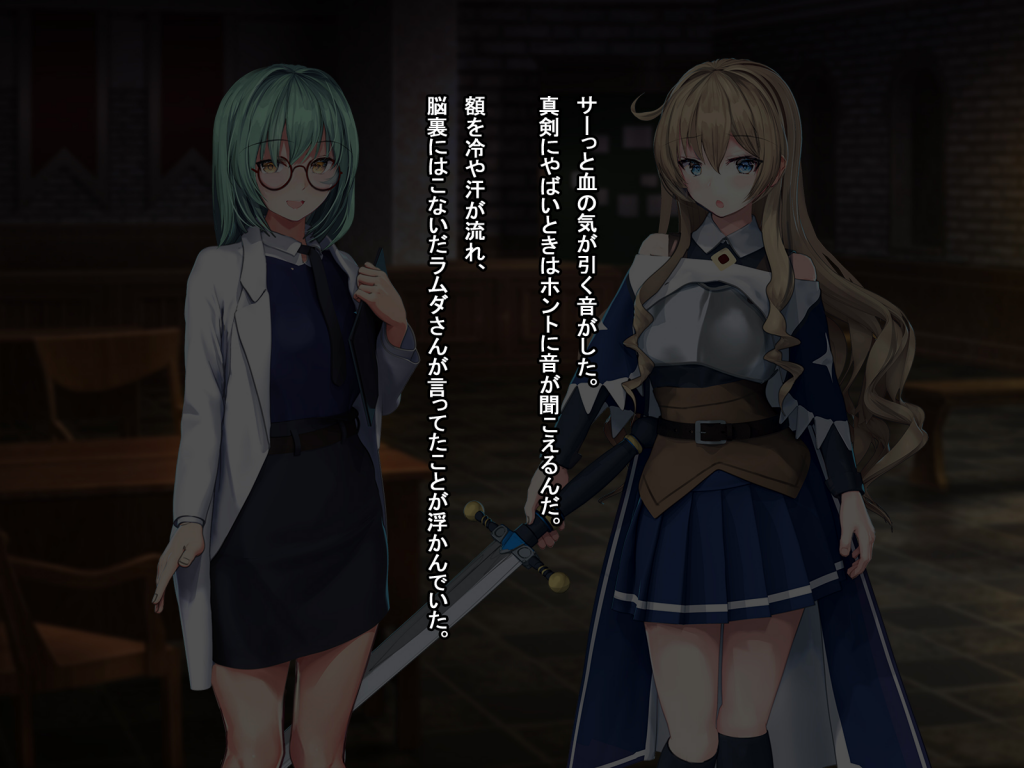
つまり……。



「エッチなことをする……っついで、
……モンスターと？」



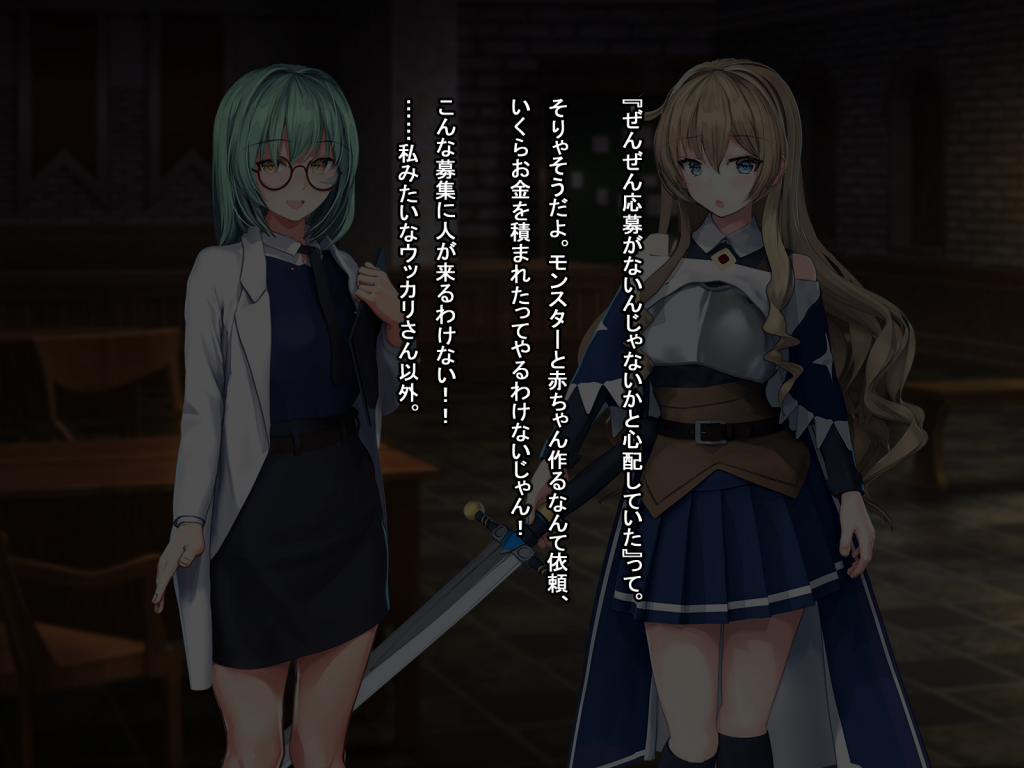
「正確には『妊娠と出産』まで含みます。
キメラとヒトとの交配を目指した実験ですので……」



サーッと血の気が引く音がした。
真剣にやばいときはホントに音が聞こえるんだ。

額を冷や汗が流れ、

脳裏にはこないだラムダさんが言ったことが浮かんでいた。



『ぜんぜん応募がないんじゃないかと心配していた』って。

そりやそうだよ。モンスターと赤ちゃん作るなんて依頼、
いくらお金を積まれたってやるわけないじゃん！


こんな募集に人が来るわけない！！
……私みたいなウツカリさん以外。

「え……つと、ごめんなさい。
私ちよつと勘違いしてたみたいで……。
今からお断りすることって、できますか……？」

慎重に言葉を選びながら尋ねてみる。
なんとなく答えは予想がつくけど。

「……お渡しした前金の返還と、
今日の実験の準備にかかった費用の補償をしていただければ、
契約上は可能です」





ですよー！
でもそのお金はもう私のポケットにはないんだよー！！
と心の中で私は叫んだ。

もらったお金はいまや立派なプレゼントに姿を変えて
自室に鎮座している。




「どうしますか？」

参加はあくまで任意ですから、

こちらから無理強いはしません……」

気落ちした様子でラムダさんが尋ねた。

せっかく準備した実験の雲行きが怪しくなったことで、
彼女もどこか不安げだ。



すべては依頼内容もよく確認せずに契約した私がわるい。
そして今更断る手立ても私にはない。

「やります。やらせてください！」

なけば涙目のやけっぱちで、私は声を大に宣言した。



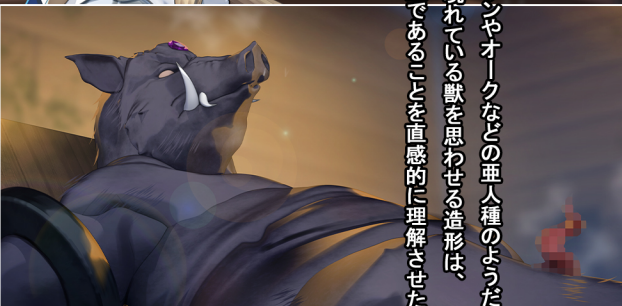
「こちらです。どうぞお入りください」

そう言ってラムダさんが案内してくれたのは、
簡素な作りのがらんとした部屋だった。

中には何に使うのがよくわからない道具や器具が
乱雑に並べられていたが、
特に目を引いたのは中央に設えられたベッドと、
その上に寝そべる見慣れないモンスターの姿だった。



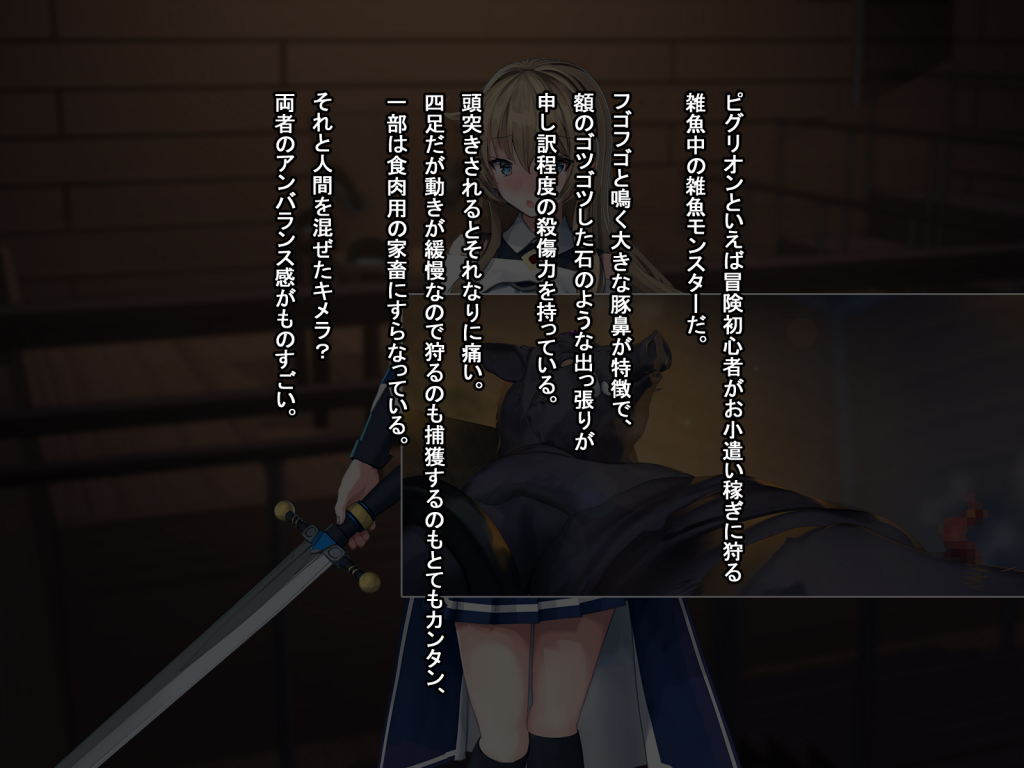
パツと見た印象はゴブリンやオークなどの亜人種のようなだったが、その顔立ちや体つきに現れている獣を思わせる造形は、このモンスターが『異質』であることを直感的に理解させた。



「私たちが生み出した、ヒトとピグリオンを素体にしたキメラです。私たちの新しい方法では素体を犠牲にしなくてよくなったので、倫理的に難しかったヒトとのキメラができるようになったんです。おかげで知能が大きく向上したんですよ」

フンと自慢げな笑顔を浮かべながらラムダさんが言った。

この人もこういふ顔をすることがあるんだ。



ピグリオンといえば冒険初心者がお小遣い稼ぎに狩る
雑魚中の雑魚モンスターだ。

フゴフゴと鳴く大きな豚鼻が特徴で、
額のゴツゴツした石のような出っ張りが
申し訳程度の殺傷力を持っている。

頭突きされるとそれなりに痛い。

四足だが動きが緩慢なので狩るのも捕獲するのもとてもカンタン、
一部は食用の家畜にすらなっている。

それと人間を混ぜたキメラ？

両者のアンバランス感がものすごい。

「この子のもっ一つのすごいところは繁殖能力があることです。

普通のキメラって一代限りのもので……

同じモンスターを掛け合わせたキメラ同士でも

微妙に混ざり方が違ったりして、子孫を残せないですよねえ。」

「でもこの子は素体であるピグリオンのメスと交配が可能だったんですよ。
産まれた仔はピグリオンに近くなりすぎて使い物になりませんが、
逆に言えば……」



「人間の女性との子供なら、もっと賢いキメラが産まれる……」
ラムダさんの言葉を受けて私は言った。

そこまで言われればさすがに私だってわかる。


「そうです。それこそがこの依頼の目的です。
ヒトの特質を濃くして、より知力の高いキメラを目指す実験です。
比較のため、ヒト側には貴女のように優れた血統と実力を持つ方から、
知力に優れた方、平均的な能力の方……
などなど様々な人々に協力を募る計画になっています」



そっか、私だけじゃないんだ……と思って私はちょっとだけホッとした。
やらしい話だけど、同じヒドイ目にあってる人が
他にもいると思うとちょっと気が楽だ。








ラムダさんに促されてキメラの側に寄った。

暴れないようにするためか、
両手両足はしっかりとペッドに固定されている。



全身が硬そうな青黒い剛毛で覆われていたけど、
股間の……その、おちんちんだけはズルムケで、
太くて赤黒いミミズみたいなのがトグロを巻いていた。

よくわかんないけど、大きい気がする。


よくわかんないけど！



「この子、すごく鼻がいいんですよ。ほら」

そう言ってラムダさんが指差した先をみると、
キメラがフニフニ言いながら
その大きな鼻の穴を鳴らしていた。


周囲の空気をもれなく取り込もうとでもするかのよう
大きく息を吸いこんでいる。



「こうやってメスが近づくと匂いで察知して
すぐ臨戦態勢になるんです。
もう一度こちらを見てください」

スッと動いたラムダさんの指先を追って
視線を動かした私はぎよっとした。






さっきまでおとなしく丸まっていた

赤黒ミミズくんが伸び上がり、まっすぐ天を衝いていた。

先っぽからはヨダレも垂れ流している。




「ナナさんの体臭で性的に興奮できたみたいですね。
準備万端です。」

それでは彼のペニスをうまくご自身の膣内へと導いてあげてください」

体臭っていうな。っていうか、うまく導いてくださいって……


私、処女なんですけど?!

なんならエッチどころかキスすらまだなんですけど!?!?



なにが悲しくてこんな初対面の、
しかもモンスターのおちんちん相手に
自分から処女を捧げなきゃならないの？
いったい私が何をしたっていうの？！

……と、ここまで考えて私はすでに
大金を受け取っていたことを思い出した。



そう、これは自業自得なんだった。
はあ、と大きいため息ひとつ。

いまさら泣き言を言っても始まらない。
ここまで来てしまった以上は覚悟を決めなきや。



私は下半身を露わにして、ラムダさんから受け取ったローションを大事なと「ろ」に塗りたくり（冷たくてヒヤッとした）、すっかり臨戦態勢のキメラの上に跨がった。

私の真下には天を衝く赤黒ミニズくん。

濡れそぼった穴の中へ導かれるのを今か今かと待ち構えている。



ちらりとキメラの表情をうかがうと、
鼻息荒く私の股間を凝視していた。
目が血走っている。

これから起る事がわかってる顔だ。
めちゃくちゃ期待されている。



おそるおそる腰を落とす。
熱を帯びた肉の先端が大事なところに触れる感触がした。

ゴクリと喉が鳴った。

……よしーがっつてやるー！



シナリオ：錫ステラ
イラスト：過ぎた卵白

私、お金のために モンスターの仔を 出産します。

高額報酬につられ、うっかり受けてしまったのは

とりかえしのつかない内容の依頼だった…。

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

テキストあり：331枚 + 差分：139枚の合計470枚
総文字数3万字超えの大ボリューム!!

ナナ

本作の主人公。

質実剛健、楽天的な性格の冒険者。実力は折り紙付き。
冒険者だった両親への憧れから自然と同じ道を志し、
天性のセンスで順調に実績を重ねて今に至る。

冒険者ギルド内ではちょっとした有名人。
明るい性格でみなに慕われているが、
調子によって失敗することもしばしば。



フリーデル

長く真っ直ぐな青髪が印象的な女性。職はヒーラー。
その丁寧な物腰から、
ギルド内では「聖女」と専らの評判である。
ただし大の男嫌い。

ナナやサリィと仲がよく、よくパーティを組んでいる。
冒険者としてナナより少し先輩で、お姉さんぶった行動をとりがち。
全てはナナへの好意ゆえだが、
その思いは胸のうちに秘めている。





サリィ

実力と家柄を兼ね備えた冒険者。
実は貴族の出で、
武者修行として身分を隠したまま冒険者生活を行っている。

面倒見がよく明るい性格で、着飾ったところもないので、
ナナと同じく冒険者ギルドの人気者。
今回は友情出演。



ラムダ

王立キメラ研究所で働く主任研究員。
今回のキメラ実験を立案した張本人である。



報酬につられてうっかり契約してしまった異色の依頼。
処女だった彼女は、モンスターの仔を妊娠・出産することになる…

